

かざ
風見
み
どり
鶏
上

杉山義法



風見鶏

かざみどり

上

杉山義法



M.k.

検印廃止

かざみどり
風見鶏(上)

昭和五十二年十月十日 第一刷
昭和五十二年十一月二十日 第三刷

著者 杉山義法

発行者 藤根井和夫

印刷 錦亨有堂

製本 錦石津製本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

												目次
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
大いなる夢	誇り高き男たち	険しい道	燃える胸の火	故郷の匂い	少年の友情	試練の日々	愛すべき人々	新しい門出	男の情熱	人の行く道	海から来た人	太地の風

237	215	194	176	155	136	118	98	79	60	41	23	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	---

装幀・さし絵
レイアウト
小松益喜
坂井てい

風^{かざ}

見^み

鶏^{どり}

1 太地の風

本州の最南端は紀伊半島の突端、民謡で名高い和歌山県西牟婁郡串本町である。青い芝におおわれた潮岬の台地には『北緯三三度三三分東経一三五度五〇分』と、最南端を示す標識が潮風の中に立っている。

その串本町から北東にかけては古座、太地、那智勝浦、新宮とつづき、熊野川をこえると三重県になる。枯木灘海岸から熊野灘に面したこれらの沿岸は、現在の男性的な景観と勇壮な磯釣りの本場として多くの観光客や釣り人たちを集めているが、昔から西国三十三カ所第一番札所である那智山青岸渡寺をはじめ熊野那智神社、熊野速玉神社など信仰の霊場としてもよく知

られていた。

「くじらとりの町」として全国にその名が聞こえている東牟婁郡太地町は串本町からおよそ二十二キロ、熊野灘に突き出た小さな半島を占めており、付近の海岸は吉野熊野国立公園の一部である。

現代でこそ捕鯨は遠く南氷洋まで出かけて行くのが常識とされているが、この太地の浦で組織的な鯨とりがはじまったのは、実に今から三百七十年もの昔、慶長十一年のことであった。始祖を和田頼元と伝える。はじめは手投釣だけによる漁法だったが、鉆と網とを併用する捕鯨法の開発によって捕獲頭数も飛躍的に増え、太地浦の繁栄がはじまった。

捕鯨の際の共同体を鯨方くじらかたと言い、太地での鯨方を統率したのは和田一族である。和田家はのちに和田、太地の二家に分かれたが、捕鯨に関する最高責任者の地位は代々継続された。

一頭の鯨を獲れば七浦潤しちのううと言われるほどの価値があり、貞享三年（一六八六）には百頭もの成果があったという。太地浦の繁栄ぶりがうかがえる。

しかし、さしもの栄華を誇った太地の捕鯨も、幕末から明治にかけては衰退の一途をたどった。アメリカやイギリスの捕鯨船団が日本近海にまでやって来て、銃砲による乱獲をしたことも不漁の原因の一つだが、太地の捕鯨が潰滅にいたった最大の理由は、明治十一年に起こった「背美流れ」の大惨事によるものである。

その年の十二月二十四日、巨大なセミクジラが太地沖に現れた。鯨とりたちの間では「背美の児持ちは夢にも見るな」という言葉があるほどの危険な相手である。しかし、折からの不漁つぎに加えて正月が目前にせまっていることもあり、宰領太地寛右衛門は多くの反対を押しきって出漁の命令を下した。

鯨は大暴れの末に網にかかりはしたが、そのまま沖合いに流れ出し、追って行った船は強風に吹き流されてしまい、一度に百二十人もの人命が失われたのだった。中には九死に一生を得て伊豆七島に漂流^なれ着いた者もあったが、打撃というにはあまりにも大きすぎた。和田、太地両家は一切の家産を投げうって善後処置にあたった。

初代和田頼元によって拓^{ひら}かれた太地鯨方三百年にわたる栄^{えい}誉^{えい}ある歴史は、ここに幕を閉じたのである。

明治三十八年、この地にも最新のノルウェー式捕鯨砲が採用されるにおよんで、僅かに命脈を保っていた網捕り法は終焉^{しゅうえん}を迎えたのだった。

大正七年（一九一八）春、和歌山の高等女学校を無事卒業した松浦ぎんは、四年ぶりに生まれ故郷である太地の海に戻って来た。巡航船が串本、大島、古座と太地に近づくにつれ、ぎんは同級生の庄司加奈子をともなつて上甲板に出た。二人は潮風に髪をなびかせながら、ふるさとの山と海を見つめていた。

「ぎんちゃん、あんたこれからどうすんの？ まさか女学校を出て鯨とりでもないやろ？」

加奈子がいたずらっぽく尋ねた。

「そやに……大きな船の船長になって、七つの海を思う存分駆け廻りたいわ……」

「女の船長なんて聞いたことないに……」

加奈子が目を丸くすると、ぎんは即座に「古い古

い」と否定し、詩を謡うように、

「……自分は新しい女である。少なくとも真に新しい女でありたいと日々に願ひ、日々に努めている。新しい女は昨日に生きない。新しい女は最早しいたげられた旧い女の歩んだ道を、黙々と、はた唯々として歩むに堪えない……」

明治四十四年、雑誌「青鞥」を発売して新しい女の出現と騒がれた平塚雷鳥の声明文の一部を、高らかに口ずさむのであった。

「結婚はしやせんのか？」

「ケッコン!? わたいが!!」

ぎんは素頓狂な声をあげ、笑いながら、

「こんなハッサイ娘（お転婆娘）を、誰が嫁さんにもろてくれんの」

そんなものが居る筈はないと言ふのだった。

松浦ぎんは、太地の鯨方の中でも花形と謳われた一番船の刃刺し、つまり鋸打ちの家に生まれたのである。幼い頃から、弟の正一よりもずっと男まさりで、父の太兵衛をして「……ぎんが男やったら、ええ刃刺しに

なるんやがのう……お母アの腹ん中にチンポコ忘れて来よって！」と言わしめるほどであった。

巡航船は灯明崎を左に曲がり、太地湾に入った。右手に見える向島のさらに上に、那智連峰が望まれる。船は汽笛を鳴らしながら船着き場へ近づいた。ぎんと加奈子が下船の用意をしていると、船着き場からは時ならぬ楽隊演奏がはじまった。

これは加奈子の兄の友彦が、ぎんの帰郷を祝って編成した楽団で、楽士たちは太地の八千代座の者と、友彦の依頼でわざわざ京都からやって来た楽士たちとで成っていた。楽隊入りの歓迎は太地では初めてのことがあったから、船着き場は大勢の人で賑わった。ぎんの弟の正一はその歓迎ぶりに驚きながら、

「友彦さん、京都の大学へ行ってるんにやろ、活動館の人と知り合いやて、大学って暇なんやにイ？」

感心していると、

「そらまあ、普段まじめに講義を聞いとりゃ、活動見に行くぐらいいは……」

と言ったが、その声は演奏の中でかき消されてしま

った。

船が着くと楽団はいちだんと音をたかめた。友彦はいち早くぎんの姿をみとめると、

「ぎんちゃん！」

声をはりあげ、手にした花束を捧げ持って歩み寄ろうとしたが、その時、ぎんと加奈子の間から大きなトラノクを手にして飛び出してきた洋装の女性があった。彼女こそ十五歳でアメリカに渡り、今、三十九年ぶりに故郷太地の土を踏んだ東タツであった。

彼女は船着き場の様子を、てっきり自分のための歓迎であると一人合点して、

「ワンダフル、ワンダフルや！ ユーらはミーのためにオーケストラまで用意してくれたんか！」

感激して言い、友彦が「は？」とあっけにとられているのかまわず、

「オービューチフル、マイ、カンツリーや！ センキユー、センキユー！」

勝手に礼を言い、友彦の手からひったくるようにして花束を奪うと、友彦の頬にキスの雨をふらせ、

「歓迎パーティは何処^{どこ}や？」

「いや、そりゃその……」

友彦が言い淀むと、

「ま、どこでもええわ、そんなら行^いこら！」

ぎんのためにと、あらかじめ用意させておいた人力車に乗り込むと、

「レッツ、ゴー！」

と叫んだ。

走り出した人力車の後を友彦が追って行^いった。その様子を見ていたぎんは、加奈子や正一と一緒に腹をかかえて笑った。

人力車はいくとも走らないうちに停まった。タツがやや大きな建物を見つけて、

「スタップ！ スタップ!!」

と声をあげたからである。

タツが勇躍のりこんだのは、太地水産組合の事務室だった。何ごとか顔をあげる事務員に、

「歓迎パーティは？」

タツは、当然のことのように尋ねたが、組合では何

のことかわからず、そのうえブロークンな英語まじりの紀州弁は聞きとりにくかった。事務員たちは派手な花模様の洋装を身にまとったタツを、珍しい獣でも見るように、部屋の外から覗き見るばかりであったから、

「お茶ぐらい出したらどうや、ブラクチないか！」

と叫んだのも無理はなかった。しかし、お茶はわかったが、ブラクチとははたして何の謂であるのか、人は首をひねったが、見当がつかなかった。タツの言うブラクチとはブラック・ティのことだったのである。

事務室の騒ぎを聞きつけて、水産組合の理事長である庄司栄策がやって来た。タツは理事長の名刺をしばらく睨んでいたが、突然、

「あんた！ 勢子の栄策ゲラ（だな）？」

と声をあげた。

「そ、そらまあ昔はそんなことも……」

栄策が奇妙な顔をしていると、

「そうや、思い出したわ！ 鯨が怖い言うて泣いてた、オジクソタレ（臆病者）の栄策や!!」

「オジクソタレって、そういうあんた、いったい誰や!？」

栄策が首をかしげていると、

「見忘れたか、三十九年前の、太地小町やゲラ（ぞ）！東タツや」

「ふーん、あのタツがのう。それにしてもようふけたなあ……」

「芋みたいに言わんすな。わたいにつけ文して、太兵衛に半殺しに逢うたんも、あんたやったな。今でもあのラブレター持ってるで……」

トランクからとり出そうとするのを、栄策はあわてて制して、

「判った、判った。もうええて……」

「こうしてると、三十九年が夢のようや。なア栄策、太兵衛さん、どないしてる？」

タツは年齢にも似合わず、妙に恥じらいを見せて尋ねた。

「ええ男やったなあ、男らしゅうて、気つぶがようて。メリケンにもあんな男らしい男はおらなんだよ。さぞ

かし立派な網元になつてゐるやろなあ……」

タツは、なつかしそうに呟くのである。

タツの言う太兵衛とは、ぎんの父親のことであつた。

ぎんは正一をともなつて母の墓前に帰郷の報告をしたあと、

「お母ま、今度は正一が中学へ行く番や。お父と二人で一生懸命働いて、立派に大学までやつて見せるサカ（から）、見ててよ」

墓に語りかけたが、正一がふと呟いた。

「わしや、中学行くのん、やめよう思うてる……」

「なんでやの!？」

「漁師になるんやったら、高等科で充分やて……」

「なに言わんの、女かて学校を出て、どんどん社会に出てる時代やのに、漁師なら高等科でええなんて理屈ないわ」

「そやかて、お父がええ言うてるもん、しゃあないわ」
「判つた。のらくら遊んでて、お父うに叱られたんやろ!」

ぎんがきめつけるように言ったが、正一はむきにな

つて、

「違ふよ! わしや、始めから中学へ行くつもりで勉強してたんやけど、こないだから、急に風向きが変わつても……」

なぜ父親の考えが変わつたのか判らなかつたが、
「姉にまかしくかませ、きつと中学へ行けるように、お父に話したるサカ……」

ぎんは明るく言い、正一と一緒に我が家へ戻つた。
屋根の上には、その昔ぎんが作ったブリキの風見鶏があつて、その下にとりつけられた風圧計が春の微風にゆっくりと廻っていた。

一歩家の中に入つて、ぎんはその荒れ方に目をむいた。炉端には空の一升瓶や茶碗がころがり、自在鉤にぶら下がっている鍋の底には、いつ炊いたともわからないウケジャ（芋粥の一種）がこびりついている。男世帯がきれいに整頓されている筈はないにしても、あまりにもひどいありさまだった。

ぎんは着替えを了えと、正一と一緒に部屋の掃除にとりかかった。父親・太兵衛の行方は正一も知らな

かった。漁に出ているのか、と問うと、

「船はもう三月も乗ってない。まだどこぞで飲んだくれてんにやる。この頃は酒びたりや。腹の足しにもならん昔の夢ばかり追うて……」

正一の言葉に、ginは顔を曇らせた。

「お父は口を開けば鯨が来ん、鯨が来ん、言うてるけど、ゴンドー鯨なら毎年来てるんやで」

「お父の言う鯨は背美鯨のことなんやで……」

ginが太兵衛の氣持を察して言うど、

「ちっほけでも鯨は鯨や。鯨とりが鯨とらなんだらカスみたいなんや！」

「正一!!」

ginが強い口調でたしなめた。

陽がぐれても帰らぬ父親を探しに、ginと正一とが港へ出てみると、太兵衛は宮の前の浜辺に腰をおろし、一升徳利をラッパ飲みしながら、ぶつぶつと独り言を言っていた。

「ケッ、くそつたれ! どいつもこいつも金の亡者になりくさって、金、金、金や! 今に見とれよ、ひと

暴れしたら津波が起こるような大背美鯨を、わし一人でしとめたるわ!」

太兵衛は暗い海に向かって両手をあげ、「ウォーッ!!」と叫んだ。それは海の王者である鯨を呼び寄せるための咆哮であつた。

ginと正一が太兵衛に近づくと、もうすっかり酔っていて、

「大砲で鯨を捕るのもええ、外国の海へ出かけて行くもええやろ……そやけどわしや、この海から離れん、わし一人でも生きてる限り、太地鯨方は生きとる。わしがきつと、鯨方を再興したるんじゃ……」

つぶやきながら、石を枕に眠りに落ちて行くのだった。それが時代に取り残された男の愚痴であり、見果てぬ男の夢と知りながらも、ginはそんな父親がたまらなく好きであつた。

翌日。

二日酔いのためか妙に黙りこくっている太兵衛に、ginはなぜ正一を中学へ行かさないのかとつめよつた。太兵衛は庭に網をひろげて黙々と繕いながら、ぼ

つりと、

「そんな余裕はないんじゃない」

つき放すように言った。

「そやかて、わたしは女学校出して貰うて、正一の時だけ余裕がないなんて不公平やないの！」

「……………」

「なあ、お父、わたしも一生懸命働くサカ、正一を中学へやって！」

「あかん言うたらあかんのや！ 鯨とりに学問は要らんわい！」

とりつくしまもなく言い放ち、あとはぎんが何を言っても応えず、網の修繕に没頭するのだった。めっきり白いものの増えた父親の頭を見つめながら、ぎんは悲しくなった。

昼をすぎた頃になって、友彦がぎんを呼びに来た。

灯明崎まで散歩に行こうというのである。

灯明崎は太地の東端にあって、熊野灘がひと目で見渡せる崖の上であった。その昔、太地鯨方が盛んであった頃は、ここに遠眼鏡とよめがねを持った見張りが立ち、沖合い

に鯨の遊泳を認めるやいなや、のろしや旗などによって、待機している鯨とりの船に知らせた場所である。

潮風に髪をなびかせているぎんに、

「なあ、ぎんちゃん、僕のことだない思うとる？」

友彦がおずおずときり出した。

「別に……………」

「素っ気ないなあ、ほかに言いようがあるやろ、好きやとか、嫌いやとか…………嫌いやったら困るけど…………」

「ええ人や。優しいし、よう気がつくし…………」

ぎんの言葉に友彦は相好を崩しかけたが、

「ちょっと頼りないとこあるけどに、そのぐらいはまあ愛嬌のうちやゲラ…………」

「褒められてんのか、くさされてんのか、よう判らんや」

友彦は言い、

「これでもな、京都へ行ったら、ちょっとした顔なんやで」

胸を張って言った。

「そらそうやろ、大学生やもん。女の子にようモテる

んにやるに……」

ぎんが相づちを打つと、友彦はこれは内緒だから誰にも言っではいけないと念を押して、

「実はな、ぎんちゃん。僕、大学行ってるいうの、嘘なんよ」

と言ひ出した。はじめは確かに講義にも顔を出していたのだが、学校よりも活動写真の方が面白く、今では活弁修業の方に身を入れていたのだった。

友彦は立ち上がると説明者のポーズをとって、

「へさて、時移り人は去り、早や十年の歳月は夢の如く過ぎ去りまして大正七年春三月、美しき南紀州の浜辺を逍遙する若き男女の姿がありました……」

その口調はすっかり活弁のそれであった。ぎんが面白がって「名調子!!」と合いの手を入れると、友彦は活弁の口調のままで、

「へぎんさん、僕と結婚してくれませんか、僕は必ず君を幸福にしてみせますよ」

あっけにとられているぎんにかまわず、友彦は女の声色で、

「へまあ、私、どうしましょう！　だって、私、子供の頃からずっとずっとそのお言葉を待っていたんですもの、それなのに友彦さんたら意地悪ばかり……」
一人で身悶えしながら熱演を続ける友彦の姿に、ぎんは笑いこころげた。

その夜、庄司家の庭では、加奈子とぎんの卒業祝いと東タツ女の帰国祝いを兼ねたパーティが開かれた。まるで小学校の運動会のように色とりどりの万国旗が飾られ、友彦が京都から招いた活動写真館の楽士たちが「天然の美」や「天獄と地獄」などを賑やかに演奏した。この席に招かれた水産組合の事務員たちは、太地はじまって以来のハイカラな宴に酔いしれた。

宴もたけなわになった頃、栄策がぎんに一曲歌うようにと言ひ出した。是非と乞われては断わるわけにもいかず、ぎんは立ち上がって、シューベルトの「菩提樹」を歌うことにした。

夜のしじまをぬって、ぎんの歌声が流れた。明るく澄んだぎんの声は、遠い海鳴りにも負けず響き渡った。歌い終ると盛大な拍手が湧きあがった。ぎんは恥ず

かしそうに、それでも笑顔で頭を下げた。

栄策が中央に進み出ると、ひどく改まった口調で、

「ええ、この席をお借り致しまして皆様に御報告申し上げます。只今のは、親同士が認めました、伴友彦の許婚者でございまして、近々、当庄司家の嫁になる、松浦ぎんさんの歌でございました！ 今後ともよろしくお願い致します!!」

そのとたん、拍手や歓声が起こり、中には口笛を吹く者もあった。友彦は大いに照れていたが、ぎんにとつてはまさに青天の霹靂であつた。

ぎんははじめたように椅子から立つと、庄司家の庭から飛び出し、浜辺へ向かつて走つた。

本人にも知らずに、いったいいつそんなことが決められたのか！ ちょっぴりと「新しい女」の生き方を模索するぎんにとって、それは堪え難い侮辱のように思えた。

事情を説明してもらおうと家に帰つてみたが、太兵衛は空の一升瓶を枕に高いびきであつた。

朝になって、友彦との婚約について、親同士の話が

出来ていふのはどういふことかと問うぎんに、太兵衛は不機嫌な顔で、

「昔の話や！ 酒の上のざれ言じゃ!!」

ぶっきらぼうに言うのだった。

「そんなら断つてもええんやにイ？」

「勝手にしたらええがな」

「ほんまにええんやにイ？ あとでお父が困るようなことはないんやにイ？」

念を押すと、太兵衛はそれには応えず、ぶいと部屋から出て行つてしまつた。父が何かをかくしていることはその態度からもうかがえたが、はっきりと説明してもらえないのなら、庄司家へ行つて聞かせてもらうほかなかつた。

ぎんの訪問に、友彦の母の由起はいそいそと茶菓子を出した。由起は往年の鯨方宰領である太地家の血の流れをひいており、おだやかなもの腰の女性であつた。

「昨夜は、すみませんでした。ご挨拶もせんと帰つてしまつて……」